



流麻二果

JOSHIBI no.186

自分の感性に、 どこまでも正直に。

圧倒的な色彩感覚で、キャンパスに瑞々しい色を踊らせる画家、流麻二果さん。油絵に没頭し、画家を目指すとした高校2年生の頃から着々と本質的な力を蓄えてきた様子と、「絵は続けるほどに楽しくなる」と明言する現在の心境に迫ります。

Photo 小林亜佑 Text 立古和智

ア

「アーティストや女優、歌手といった表現者がたくさんいる家で育った私は、何かを創ることが大好きな子どもでした。しかし「決められた紙に描く」「課題に沿って作る」といった小学校の図画工作になじめず、二度は創ることが大嫌いになります。であるにも関わらず、香川県高松市から東京に出てくる際、親に薦められたのは女子美の付属中学でした。小学校の担任には「必ずドロップアウトします」と警告されたほどです。そのため入学してからも絵画に対する苦手意識は強いままでしたが、高校1年で油絵を初体験したことが転機になります。文字通りこれが「鮮烈な出会い」で、「これは絶対にハマる」と最初に確信しました。予感通り、その日を境に油絵に夢中になり、絵で生きていきたいと思ったものの「親の七光り」で「二世作家」として世に出るのは絶対に嫌だった。だから悩みました。自分には才能はあるのか。食べていけるのか。その可能性が知りたくて

父や、父の知り合いの美術関係者に会ってもらおうと、みなさん「良いものを持っている」と背中を押してください。そこで高校2年の時点で「プロの作家になる」と宣言し、女子美では洋画を専攻しました。父を含むいろんなアーティストを身近で見えてきた私は、当時から作家として生きることを大変さを知っていたつもりです。本音をいうと作家になれる自信は全然ありませんでしたが「描きたい」という情熱だけは溢れていました。

そんな調子でしたから、大学時代からずっと「作家としてどんな作品で世に出るか」に集中していました。学校の課題にも、そんな意識で臨んでいたほどです。先生からの意見に対しても「私はいまさらうしたくありません」と反論するほどの生意気さ。そんな私を佐野ぬい先生は「私の言うことを全然聞かなかった教子です」と笑って人に紹介してくれましたが、今になって振り返ってみると、もう少しいろんな先生の意見に耳を傾けて、





ら、私が引き請ける理由が見いだせません。どんな仕事を前にしても、作家としての自分の感性を一番大切にすべきです。ちなみに最近だと、ドラマ「カルテット」への作品協力をしましたが、こういった仕事ではギャラリーで展覧会をするときは観てくれる人の数や客層がまったく異なるのが魅力です。私自身を知ってもらうだけでなく、アートの啓蒙になることにも意義を感じながら、企業とのコラボレーションは行っています。

現時点では、大それた目標のない私ですが、80代、90代になっても展覧会に人が集まる作家でいたいですね。20代の頃は描くのが本当に辛かったけど、歳を重ねる毎に楽しくなっています。きっと続けただけ楽しくなるのでしょう。この先、自分がどんな絵を描くようになるのか自分でも楽しみです。身体的に衰えていく部分と、内面的に成熟していく部分とのバランスの中間にいるのが現在だとすると、これから年を重ねながら視力や体力なんかは衰えていくでしょうけど、そこで私は何を描くのか。自分の老いに対して「まだまだ若いぞ」といきり立つ作家さんも世の中にはいますが、私は自分に起



いろいろな表現を試せば良かったなとも感じています。

一方、女子美の同級生たちは、変に線引きもせず「麻二果ちゃんは高い目標のある人」と見守ってくれました。「あなたはあなた、私は私」と等身大の自分でいられることも女子美の良さですが、今でも同級生に作品を観られるのは緊張します。シャープな感想を遠慮なくぶつけられてドキッとすることもあります。私を見守ってきた友人たちは女子美で得た一番の財産です。

プロの作家として私が惹かれるのは美しいだけではなく何か揺さぶられるものがある作品です。ヒヤッとする。胸騒ぎがする。ざわざわする。そんな側面がある作品を生み出したい。それに作家としては作品に正直でい続けたい。きちんと作りたいものに正直になれているか。完成した作品に対して言いわけなしで世に送り出せるか。自分の感覚に正直でないならアーティストである必要はありません。私はいろんな企業と仕事をする機会が比較的多い方ですが、もし「クライアアントが、赤がいい」というので赤にしよう」と自分の感性に反して創ってしまうような



流 麻二果 (ながれ・まにか)

1997年、女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻卒。2000、06年「VOCA展」(上野の森美術館)に出品。2002年以降、文化庁新進芸術家在外研修員、ポーラ美術振興財団在外研修員としてアメリカ、トルコで作品を発表。2015年にはアパレルブランドのENFOLDや、資生堂とのコラボレーションでアイテムを発表。アートに触れる機会のない子どもにアートを届ける「一次画伯」発起人。
<http://www.manikanagare.com/>

『辻を逸れる Whenever You Pass the Corner』2015
各1800×1400mm 4枚組 Oil on canvas
高松市美術館蔵 撮影:加藤 健

こっている出来事を受け止めて、等身大の自分から自然に出てくるものを描きたい。日本の女性は加齢を「減点」と捉えがちですが、絵は逆。加点方式なのがいい。自分の人生を映し出すものであり、一生ものの楽しみですよ。



大村智名誉理事長 ノーベル賞受賞記念碑、除幕式を開催

2015年にノーベル生理学・医学賞を受賞された本学名誉理事長の大村智先生は、本学で長きに渡り学校経営に携わり多くの改革と共に大学発展に寄与されたこと、ノーベル賞受賞の功績を讃えられ、本学杉並キャンパス（杉並区和田1-49-8）に記念碑が建立されました。6月3日に執り行われた除幕式では、田中良杉並区長や内藤久夫、葦崎市長をはじめとする多くの来賓がお見えになり、各報道メディアも取材に駆け付けました。記念碑の正面に据えられたレリーフは本学彫塑教室の創設者である桑原巨守名誉教授の門下生で、本学卒業生の柏原花子名誉教授が制作。レリーフ下部には大村智先生直筆の「創造開拓」の文字が据えられ、記念碑は横井玉子先生、佐藤志津先生、佐藤達次郎先生の創立者像のように学生・生徒を優しく見守り、そして親しまれる像になることでしょう。



〈女子美術大学列席者〉

名誉理事長 大村智
理事長 福下雄二
学長 横山勝樹
名誉教授（制作者） 柏原花子、ほか

〈来賓の方々〉

葦崎市長 内藤久夫様
杉並区長 田中良様
佐倉市長 藤和雄様
学校法人北里研究所理事長 小林弘祐様
北里大学学長 伊藤智夫様
順天堂大学学長 新井一様
東京理科大学学長 藤嶋昭様
相模原市市民局次長 樋口一美様



総勢200名が参加した 女子美史上最大のアートイベント 「じょしりき【女子力】」展を 原宿で開催！

8月11日から3日間に渡ってデザインフェスタギャラリー原宿で「じょしりき【女子力】」展が開催されました。本学在學生に限らず卒業生や関係者も含め総勢200名にも及ぶ学外で最大規模のアートイベントを初開催。サブカル文化の発信地ながらの前衛的な作品もあれば油絵や陶芸など伝統的な技法を用いた作品も展示され、オリジナルのイラストカード、ハンドメイドのアクセサリなどどこでしか手に入らない限定グッズの販売も展開していました。本学付属校出身者によるアート団体「愉鳴呼社（ゆああしや）」の乗り込み

型展示作品「ヨッ車!!」では、湯上りタオル風な衣装の愉鳴呼社メンバーと共に、サイケデリックな湯けむり山車にお賽銭を入れると「愉みくじ」で運勢が占えられるというもので多くの来場者が体験していました。本展には海外からの観光客も多く訪れ、普段本学に馴染みのない方にも学生たちの作品を見ていただく良い機会に。「男よりも男前、女よりも女前」という副題から滲み出る本学ならではの「群れない、違いを認め合う・自由な・力強い」流行に流されない「そんな・力」が込められた作品が原宿に集いました。





世界的フォトグラファー・レスリー・キー氏の特別講演、 パフォーマー・小林直己氏を交えたアートイベントも開催

9月25日、世界で活躍するシンガポール出身の写真家、レスリー・キー氏の特別講演が開催されました。聞き手として一緒に登壇したのは大学院博士後期課程（洋画）在籍中の朝倉優佳さん。ふたりは本学客員教授である山本耀司先生のパリコレに参加した際に知り合い、写真と絵画という異なるジャンルながら一人の作家として制作活動するお互いに、直ぐに意気投合したとのこと。講演会では2011年から初めてパリコレに携わった時から現在に至るまで、緊迫する本番前夜のアトリエの映像やステージ裏で直前まで服の手直しを施す山本先生の写真など貴重な資料も紹介されました。2015年、世界に衝撃が走ったパリ同時多発テロ事件をきっかけに自身の無力さを痛感し、何か出来ないかと考えてフラン

ス国旗をモチーフに制作した映像作品「Phantom」の二部を投影。聴講した方々は息を呑むような迫力と瞬く間に移り変わる展開に、直ぐに引き込まれていました。後半では特別ゲストとしてEXILE／三代目 J Soul Brothersのパフォーマー・小林直己氏がサブライズ登壇。パフォーマーとして活動しながら、ヨウジヤマモトのパリコレモデルとして参加したことからレスリー氏や朝倉さんとお知り合いになったとのこと。パリコレの現場で初めて山本先生とお会いした時に「会場に居るお客さんは敵だと思つて睨め」と指導されたと言及り、70歳を越えてもなおサムライのような山本先生の「渴き」に驚きと同時に安心したとコメント。「ダンサーとしてパフォーマンスを続ける事に想いが枯れるので

はと心配していたのですが、山本耀司さんを見て、自分も信念を貫いてやっていく自信になった」と話されていました。講演会後、場所を体育館に移して「ライブペインティング×ダンスコラボレーションイベント」を開催。音楽に合わせて小林氏が創作ダンスを踊り、朝倉さんと本学学生2組がライブペインティングを実施、会場の様子含めてレスリー氏が撮影をするというもの。会場には多くの観客が駆け付け、油彩・織・インスタレーション制作とともに眼前で自由に舞い踊る小林氏のダンスの迫力に「同釘付けとなりました。レスリー氏はアーティストたちの様子だけではなく、観客含めて会場のすべてを対象に撮影を行い、終了後は割れんばかりの拍手に包まれました。



特別招聘教授 假屋崎省吾先生特別講義開催

今年から本学の特別招聘教授に着任した假屋崎省吾先生の特別講義が、4月28日と5月26日に杉並キャンパスで開催されました。假屋崎先生はいけばなをはじめ、着物やガラス器のプロデュース、美術装飾なども手掛けられ、メディアに引っぱりだこの多彩な華道家です。開催された2回の講義では、華道家としての歩みから国際的な舞台でのお仕事など、多岐にわたる活動のご紹介とともに、いけばなのデモンストレーションを両日行っていました。1回目の講義では、假屋崎先生がアーティストとして活躍されるまでのエピソードを作品写真と一緒に紹介いただき、いけばなを生かしたフレイヴィンスタレーションを制作するようになったきっかけについてもお話いただきました。2回目の講義では、假屋崎先生プロデュースの富士山型・ガラス花器の製作エピソードや、実際にお仕事で手掛けられたいけばな作品の紹介、商品ディスプレイについてなど、ご自身の体験談を盛り込みながらユーモアたっぷりにお話いただきました。



「現在・過去・未来 なんちゃって」 相模原キャンパスにて開催



日本を代表するグラフィックデザイナーの佐藤卓氏、株式会社資生堂のデザイナーとして知られ今年度から芸術学部 デザイン・工芸学科 ヴィジュアルデザイン専攻教授に就任した澁谷克彦先生、空想建築を描く画家で同専攻教授の野又穂先生による鼎談が7月15日に開催されました。かつて東京藝術大学デザイン科に在籍し現在は異なるフィールドで活躍中の先生方。本学では2013年1月にも「DesignとArt」というテーマで特別講義が行われ大盛況となりましたが、今回は夏の集中講義としてオープンキャンパス初日に開催。過去に制作した作品や学生時代の過ごし方、現在の職に就いた経緯などお話いただきました。「デザイナーはかっこいいもの、お洒落なもの、かわいいもの、洗練されたもの、そういうことだけをやる人たちと思われているところがあります、地道で細かなデザインにもきちんと応えること、当たり前前の

ことを丁寧に仕上げることはとても大切なんです」そう教えてくださったのは数多くの企業やメーカーに携わりデザインを手掛けている佐藤氏。そんな佐藤氏ですが、デザイナーとして確立するまでに迷いがあつたことを明かし「実は自分の最初の仕事『ニッカビュアモルト』が世の中に出た頃まだアーティストになりたいという気持ちは捨ててなかった。昼間はデザインの仕事をして夜はアパートで作品を作ってたグラフィック展やコンペに出していたけれど佳作にも入らずショックを受けました。世の中から『あなたは作家には向いていない』と言われた気がした。でも今は感謝しています。うまくいかなかったことは時間が経つと有難いことになる。散々試した結果自分はデザイナーの方が向いているなと気付いたんです」とお話くださいました。美術作家として絵画表現を追求する道を歩んだ野又先生は、かつて広告代理店で仕事をしながら作品

を制作していたことについて「広告の仕事をしていて、クライアントとのやりとりの中でさまざまな制約をクリアしなければならぬことに、どこか向いていないと感じていた。なんとかしなきゃと思って、描き溜めたもので作品展を開いたんです。時期も良かったのかな」と振り返り「もしかしたら『絵』でやることがあるかもしれないと思った。広告はチームで仕事をするけれど、美術はひとりですべて完結できる。技術的な問題を感じながらも、美術表現は逸脱が許されるから自分にはこっちの方が向いているかなって」と自身のターニングポイントについて教えてくださいました。一方、大きな組織の中でデザイン業務に従事してきた澁谷先生は「クリエイティブとは別のことで頭と体力を使うことが多かったですね。マネジメントという面はどうやる気にかけるか、組織全体がどう力を発揮できるかを考えなければならなかった。もちろん個人としての制作もやっていたけれど、『人にいかに良い仕事をさせるか』という点で環境づくりをしたり、アドバイスやヒントで導いてあげたりしていた」と先生ならではの視点からデザイナーの仕事についてお

話くださいました。講義の後半、デザインの可能性についてトークが展開された場面では「グラフィックデザインをしていくなら何らかの形で文字には拘らないと。日本には平安時代から文字と絵が合体してきた長い歴史がある。文字からは逃げられないんです」と佐藤氏が解説。澁谷先生も「最近では文字を入れることがグラフィックデザインなのではないかと思える。デザインにおいて文字は、曖昧なものに意味や価値を伝える重要なものなんです」と教えてくださり、女子美生たちは真剣に耳を傾けていました。「現在過去・未来 なんちゃって」のタイトルにちなんでさまざまなお話を聴くことができた今回の集中講義。佐藤氏から女子美生に向けて「皆さんこれからいろんな会社や人に出会うと思います、なかなか思ったようなイメージではありません。がっかりしないでください。めないでください。どんな会社も理由があつて存在するので、良い方向にしようという熱意があれば必ずチャンスがあると思ってください。これから一生デザインの仕事をしたいのであれば、忍耐強く！」とエールの言葉が贈られました。



佐藤 卓

東京生まれ。東京藝術大学美術学部デザイン科卒業後、同大学院形成デザイン科を1981年に修了。株式会社電通を経て1984年、佐藤卓デザイン事務所設立。ロッテ キシリトールガム、明治おいしい牛乳、NHK Eテレ「デザインあ」の総合指導、「デザインの解剖」展プロジェクト、等々を手掛ける。



澁谷 克彦

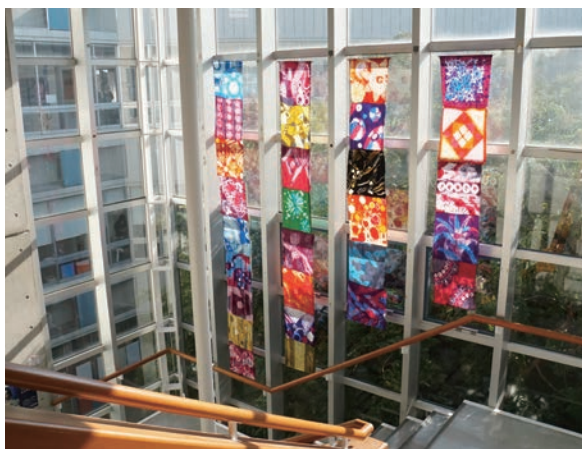
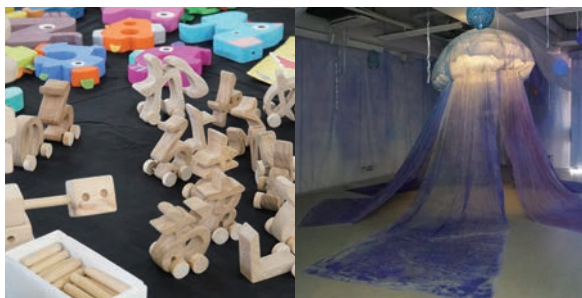
1957年東京生まれ。東京藝術大学デザイン科卒業、資生堂宣伝部入社。数多くの広告のアートディレクションやグラフィックデザイン、「花椿」の編集デザイン、グローバルブランドのトータルなクリエイティブディレクションを手掛ける。



野又 穂

1955年東京生まれ。東京藝術大学卒業。実在しない建造物をモチーフとして独自の空想建築を描く。東京オペラシティアートギャラリー (2004)、群馬県立近代美術館 (2010)などで個展、町田市立国際版画美術館で『空想の建築—ピラネージから野又穂へ—』展(2013)。1995年芸術選奨新人賞、2007年タカシマヤ美術賞を受賞。

10月27日～29日、女子美祭が開催されました。相模原キャンパスは「てんやわんや」、杉並キャンパスでは「オノマトペ」をテーマに在学生の作品展示をはじめ、自主展示、有志による模擬店で大いに盛り上がりました。相模原キャンパスには芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域と同学科メディア表現領域の3年生がデザインした太陽光発電施設「ひだまり1な」の太陽光発電応援キャラクターとソーラーパワートラックと共に、女優・創作あーちすと、のんさんが来校して突撃ライブを実施。デビュー曲『スーパーヒーローになりたい』がライブ初披露されました。毎年恒例のゲスト講演会では相模原キャンパスにファッションデザイナーのツモリチサトさん、俳優の小越勇輝さんが来校、杉並キャンパスには声優の村瀬歩さん&山本和臣さんによる対談形式のトークショーが開かれ、大盛況のうちに幕を下ろしました。



「画と機 山本耀司・朝倉優佳」 特別講演会を開催

5月29日、世界的ファッションデザイナーで本学客員教授の山本耀司先生と大学院博士後期課程(洋画)在籍中の朝倉優佳さんによる特別講演会が相模原キャンパスにて行われました。この講演会は2016年12月10日～2017年3月12日に東京オペラシティアートギャラリーで開催された展覧会「画と機 山本耀司・朝倉優佳」を振り返りながらおふたりが自由にトークを展開するというもので、会場にはたくさんの女子美生と教職員が駆け付けました。大きな注目を集めた「画と機」は、服という3次元の表現に向き合い続けてきた山本先生が初めて公の場で平面作品を発表したことも話題になりました。幼い頃から絵描きになりたかった山本先生にとって、2次元の表現の難しさを改めて思い知らされた展覧会だったそうです。そんななか、朝倉さんがデッサンやペイントを施した服を針金や流木でつくったボディに着せたインスタレーションについては「あれは面白かった、モデルが着るより迫力があつたし、服によって

は実際に女性が着るよりもセクシーだった」と新しい発見があったことについても話されていました。「画と機」をはじめヨウジヤマモト社とのコラボレーションや制作において山本先生の言葉に何度も励まされてきたという朝倉さんは「山本先生からいただいた言葉を信じて制作できたことが私にとっても大きなことでした」と振り返り、「個性は人が発見してくれる。君らしいね、あなたっぽいね、そう気付いてもらえるまで続ける。その内身体が覚えて、指先から気持ち伝わるようになるから」と話す山本先生の言葉に大きく頷いていました。講演会の終盤には山本先生から女子美生に向けて「すごい絵や服や作品によって人が勇気づけられたり元気づけられたり、目が覚めたりして人生に対する構えが変わる瞬間がある、ということを感じてください。これからの日本、これからの世界を変えられるのは、アートだ。みんなの力だ」と激励の言葉が贈られ、会場は大きな拍手に包まれました。



Q 5

制作・仕事をする上で大切にしている考え方を教えてください。

芸術家の仕事は、どのような“驚き”を見る側に提供できるかを考えることだと思います。そして、その驚きとは、たとえどんな種類のもので、人生を豊かにするものでなくてはなりません。いつも、自分の作品がどのようなメッセージを見る側に与えるのかを意識して制作しています。視覚芸術は、色や形などのイメージを用いて言語表現とはまったく別の方法で、繊細で曖昧な感覚を“メッセージ”として伝えることが出来る手段です。この視覚芸術という手段を意識し、自分が表現したい主題をあらかじめしっかり確認することで、我を見失うことなく制作に没頭できます。

Q 6

大学時代にやっておくべきことについて、アドバイスをお願いします。

本を読んだり展示を見たり、友人や教授と話したり、とにかく自分自身を豊かにすることに大学生活の時間を費やして欲しいです。そうすることで、卒業後に人生の様々な岐路で大切な選択をしなければならないときに、周りに流されずに自分自身にとって最適な判断が出来ると思います。

Q 7

海外で制作・仕事をする事の“楽しさ”を教えてください。

西洋の社会に身を置くと、逆に自分が日本人であることが強く意識されます。異邦人であることは、それまで知識でしか知らなかったそれぞれの文化の違いや魅力を、肌で感じ体験することが出来ると知りました。イタリアで出会う人々は、そんな私を感じた新鮮な感覚を、作品の中に敏感に感じ取り共感してくれます。作品を通すことで、文化の違いを超えて、同じ感動を共有出来るのがなによりも嬉しいです。

Q 8

やりたいことや夢を実現するためのヒントを教えてください。

難しくてもあきらめないで、少しずつでもいいので前に進んでください。その過程で、新しい出会いなど様々なことが待ち受けていると思いますが、その経験を糧にしていくことが、夢に近づくヒントです。

Q 9

後輩(女子美生)に一言メッセージをお願いします。

女子美の卒業生には、多彩な才能を花開かせた方々が驚くほどたくさんいます。イタリアにもたくさん卒業生がいるのですが、どなたも自由に力強い方ばかりです。後輩の皆様も、これからどのように飛び立っていくのか楽しみです。自身が持つ魅力を信じて、それぞれの道を極めて行ってください。



Simbiosi armoniche / シンビオージ・アルモニケ VIII 2016
布に木版、枝
300×150×150cm



2015年ミラノの画廊で開催された個展『調和・振動する共生空間』の展示作業の様子



2015年ミラノの画廊で開催された個展『調和・振動する共生空間』の展示風景



Simbiosi armoniche / シンビオージ・アルモニケ III 2015
布に木版 148×166cm
女子美同窓会主催、若手支援展受賞作品



Bisbigli / ささやき 2016
布に木版
30×25cmが6枚



飛鋪 亜紗子 (ひしき あさこ)
美術家。2004年絵画学科洋画専攻卒業。翌年イタリア・ポローニャ国立美術学院に入学。2010年からイタリア国費給付留学生として同学院の修士課程に在籍し、2015年修了。2009年から北イタリア各地で個展を開催し、様々なグループ展に参加する。2015年に野村財団美術部門助成プロジェクトにより、ミラノの画廊で個展『調和・振動する共生空間』を開催する。植物や木々といった自然にあるテーマを題材とし、木版を用いた独自の技法によって、時間や記憶、それらにまつわる音や感触などを表現する。

飛鋪 亜紗子

Q 1

なぜ海外で活動・仕事することを選んだのですか？

イタリア留学を決意したのは、私が洋画専攻だったということもありましたが、もう少し切実だった問題は、漠然としたある「型」から抜け出せない自分に、ジレンマを感じていたからです。イタリアに来て目を開かせられた出来事は、「西洋」とは「東洋」とは何かという問題意識を、多くの人から投げかけられたことで、その問題をとてもよく考えさせられたことです。これは、自分を形成する世界観がどのように組み立てられているのかを解き明かす、重要な鍵になりました。根っこになるルーツは日本文化ですが、そこに入り混じった西洋的な要素も存在していたからです。私が表現する作品のテーマは、そんな自己に対する探求から自然と生まれています。今はまだ「西洋」と「東洋」の間にある海を、自由に泳いでいたいという気持ちが、イタリアで制作活動を続けている理由の一つです。

Q 2

女子美時代は、どんな学生でしたか？

とにかくマイペースでしたが(笑)、様々なことに興味を持つ好奇心旺盛な学生だったと思います。低血圧で朝に弱く、アトリエに向かうのほとんど午後以降で、校舎が閉められる直前まで制作していました。

Q 3

女子美時代の印象深い思い出を教えてください。

在学中に相模原校舎で行われた、スイス人の玩具デザイナーの先生による講演会で、とある学生の質問に対する答が心に強く残っています。「アイデアはどのようにして見つければいいの。」という質問に対して、「ヒントは常に私たちの周りに降り注いでいます。私たちは、ただ両の手のひらで受け取ればいいのです。」でした。このシンプルな返答にはとても驚かせられました。創造のためのヒントは目に見えないけれど私たちの周りに常に降り注いでいて、手のひらで受け止めることは難しくないということ。この言葉はいまでも、制作に行き詰まった私を助けてくれます。

Q 4

美大の中でも、女子美を選んだのはなぜですか？

美術を学ぶ場所として、他の美大にくらべて、女子美の自由な校風に魅力を感じたからです。女子美での4年間は、好きなことをのびのびと学ぶことが出来ましたので、それは正解だったと思っています。今思えば、相模原校舎で過ごしたゆったりした時間の中で、良い先生方や良い友人に恵まれ、自分をしっかりと確立することが出来たと思います。



01 | 海外サマー・スクール バーミンガム・シティ大学にて開催

本学と学術交流協定を結んでいるイギリスのバーミンガム・シティ大学において8月5日～28日に海外サマー・スクールが実施され、女子美生16名が参加しました。前半2週間はロールプレイングやゲーム、お芝居を取り入れた英語研修を受講し、実技ではドローイングやフォトグラム、ファッション、刺繍などの基礎テクニックや表現方法を学びました。バーミンガム・シティ大学の学生と取り組んだプロジェクトでは、異なる視点から物事を見ることや新しいアプローチの仕方を学んだほか、市内の小

児病院では子どもたちと一緒に制作に取り組み、アートが引き出す笑顔とパワーを改めて感じました。ロンドンやリヴァプールでは美術館や宮殿、寺院を見学し、終盤には8日間のホームステイも経験。現地のファミリーに温かく迎えられ、楽しそうに接する姿がみられました。言葉の壁を越え人との繋がりやコミュニケーションから多くのことを学んだ24日間。サマー・スクールに参加したことをきっかけに、女子美生それぞれが心に響く大切な「何か」を得られたのではないのでしょうか。



02 | 第5回「美術教育セミナー」開催

文部科学省が定める指針「学習指導要領」が改訂され、「主体的・対話的で深い学び」と示されたポイントについて、美術教育ではどのような授業改善が求められるのか、セミナーを通して理解を深めて活発な意見交換が行われました。文部科学省より東良雅人調査官をお招きして講演いただいたほか、都立高および県立高の美術教員による実践レポート発表や全体講評会などが催され、小学・中学・高校の図工・美術教員が情報交換を行える貴重な場となりました。

NEWS — & — TOPICS

ファッションデザイナー 山本耀司客員教授特別授業

5月23日と5月27日の2日間、本学客員教授である山本耀司先生による芸術学部アートデザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域の特別授業が開催。それぞれの授業では前半に山本先生より直々に服づくりの考え方や縫い方や裁断についての技術的な指導をいただき、後半はデザイン画のチェックが行われました。1回目の授業では、大学院生と4年生が制作したトワル（試作段階の服）を学生にさせて服のバランス確認や、偏りから技術的な修正の仕方や、パターン（型紙）の確認を行いました。服をトルソーに着せることと人体に着せることは異なり、人体に着せた場合、体の自然な曲線により布地の張りや垂れ具合が変化します。そうしたトルソーで制作していた時と人体に合わせた時の違いを、

実際に山本先生がハサミとピンを使って学生のトルソーを修正し、パターンの引き方を実演したりと、プロの視点からの指導が行われました。2回目の授業では前回、山本先生より指導いただいたトルソーをもとに縫製した作品の修正確認と講評が行われました。トルソーの制作で使用した軽いシーチング（綿布）とは違い、縫製した布地には重みがあるため、重みで生じた服の垂れや引っ張りの修正方法や、パターンの見直しが行われました。授業の最後に山本先生より、「作ることは生きること。授業の時だけ作るのではなく、作ることを『生活』となるように、作ることを習慣にしてほしい。」と、作ることの大切さを学生にメッセージとして贈られました。



05 | 中島由貴さん 照明学会論文賞受賞

2014年度に女子美の大学院博士後期課程（色彩学）を修了し、現在は助手兼研究員の中島由貴さんが一般社団法人照明学会から「第29回照明学会論文賞」を受賞しました。この賞は過去2年間の照明学会誌、英文誌に掲載された論文の中から特に優れたものの著者に対して贈られるもので、難易度が高く大変栄誉ある賞です。美術館や博物館での鑑賞者の意識と照明の関係について学生時代から研究続けてきた中島さんは2015年に同学会から研究奨励賞を受賞。その後も全国各地で開

催される学会に参加し、国内外の美術館や博物館で展示環境や照明の調査を行ってきました。「工学系の大学や企業の研究者の方がたくさんいらっしゃるなか、美術系の大学に所属しているからこそその視点で研究を進めることができ、このような賞を頂けたことをとても嬉しく思います。今後も照明に関わる色彩科学の研究を続け、照明機器を扱う企業やメーカーだけでなく、照明デザイナー、学芸員、そして鑑賞者を繋ぐ架け橋のような存在になれたら」と笑顔で話してくださいました。



03 | 客員教授 萩尾望都先生講演会

7月16日、オープンキャンパス（杉並キャンパス）にて本学客員教授である萩尾望都先生の講演会が開催。40年ぶりに新作が発表された「ポーの一族」をメインにお話いただきました。普段は過去の作品を読み返さない萩尾先生ですが、今回の講演会の資料の為、全て読み返されたそうで、単行本には付箋がぎっしり。学校の息づかいがダイレクトに残る当時のテンションの高さに驚き、「若い時に描ける作品もある

れば、歳をとってから描ける作品もある」と振り返りました。新作を描くに至った経緯や、1970年代執筆当時のお話、登場人物たちのエピソードを単行本をめくりながらじっくりご紹介。その他、別名義で執筆されていたSF小説や、「ポーの一族」が来年1月から宝塚歌劇団による上演が決まったこと等、盛りだくさんの内容に来場者の方々は、熱心に耳を傾け大盛況のうちに幕を下ろしました。



06 | ルネサス エレクトロニクス株式会社と 産学連携授業

本学デザイン・工芸学科 プロダクトデザイン専攻とルネサス エレクトロニクス株式会社は、2016年度から産学連携が行われています。3年次授業の取り組みとして、同社開発の「タッチキー（静電容量方式）」を用い、エンジニアの方々の協力を得て、実際に動くモデルを制作。5グループが取り組んだ成果について、WEB投票が行われました。1位となったのは、

枕と連動し、15分かけてゆっくりと光が消えるように設計されたスタンドライト「快適な眠りへ導く『p-light』」。本社で開催された受賞式ではトロフィーが授与され、基板を使用したプログラミング体験会など、貴重な経験となりました。

授業担当 芸術学部 デザイン・工芸学科 プロダクトデザイン専攻：主任教授 松本博子



04 | JOSHIBISETAN開催

伊勢丹と女子美のコラボレーション企画「JOSHIBISETAN」が4月26日から5月7日までの12日間、伊勢丹相模原店にて開催されました。この企画は本学デザイン・工芸学科 工芸専攻教授の渡邊三奈子先生とプロダクトデザイン専攻教授の松本博子先生を中心に、研究室スタッフの協力のもと実現。企画構想から1年以上かけて制作した女子美生の個性豊かな作品が、1階から6階にそれぞれ展示されました。会期中にはギャラリーツアーなども開催。訪れたお客様の目を楽しませる展示となりました。





09 | ICAF2017開催

インターカレッジ・アニメーション・フェスティバル(ICAF)2017は、アニメーションを学ぶ教育機関の教員推薦による学生作品を上映する映画祭です。全国から29校が参加し、9月15日～18日に国立新美術館で開催されました。最終日には、協定留学生1名を含む本学アート・デザイン表現学科メディア表現領域在学生の6作品、2016年度卒業制作の2作品の上映を行い、上映作品は、手描き、3DCG、ストップモーションといった多様な表現で制作され、多くの来場者に見ていただきました。上映後のインタビューでは、メディア表現領域の季里先生、金多賢先生、若見ありさ先生が作品解説と共にアニメーション教育について紹介。会期中には、懇親会が開かれ、参加校の学生やアニメ関係者と交流できる貴重な場となりました。



①3DCGアニメーション
作品タイトル:IF 作者:メディア表現領域2016年度卒業生 染野成美



②ストップモーションアニメーション
作品タイトル:ハニ男 作者:メディア表現領域2年 蟻川夢子



10 | 女性向けスマートフォンアクセサリを プレゼンテーション

スマートフォンやPC周辺機器メーカーの株式会社オウルテックは、2016年度から本学と産学連携を行っています。今回、デザイン・工芸学科 プロダクトデザイン専攻教授の松本博子先生の指導のもと、3年生がチームごとに女性向けスマートフォンアクセサリと

商品パッケージをデザインして、社内でプレゼンテーションを実施しました。また、商品撮影スタジオや特殊なプリンター機械、製品サンプル等、社内の設備や展示商品を見学させていただき、学生たちは今後の制作活動に活かせるように熱心に説明を聞いていました。

07 |

特別講習会で中国画を学ぶ



本学と上海交通大学は2013年より、国際文化交流のさらなる発展を目指し中日芸術文化交流のプラットフォームとして芸術文化交流を頻繁に行っています。両学で毎年交互開催している教員交流展「百年丹青緑展」7回目の開催と合わせ、高等学校の美術教員を対象に中国画特別講習会を開催。上海交通大学の教授であり、本学特別招聘教授に就任された詹仁左先生と吳一平先生に、「花鳥風月」と「山水画」の技法を指導いただきました。先生方は中国における筆の運び方の意味合いやポイント、彩色方法について、実際に中国の画材を使用し実演を交えながら解説。参加された美術教員の方々は、水墨の含み具合や力加減に四苦八苦しながらもアドバイスを受けながら制作し、大変貴重な機会となりました。



08 |

美術監督 桑島十和子客員教授 特別講演



短期大学部客員教授である桑島十和子先生の講演が、造形学科1年生の授業として杉並キャンパスで開催。桑島先生は短期大学部の卒業生で、現在まで多くのCMや映画作品で美術監督として携わり活躍されています。学生時代のエピソードから、2016年に公開された映画『TOO YOUNG TO DIE! 若くして死ぬ』の地獄編のデザインまで、舞台の制作工程について詳しく解説。質疑応答では多数の学生から質問が殺到しましたが、桑島先生は自身の体験談を交えて受答えました。また、桑島先生の数々のスケッチやデザイン画が見られる時間も、学生たちは真剣な眼差しで見つめていました。

JAM

何香凝芸術名作展

9.19(火) - 9.29(金)

私立女子美術学校(現女子美術大学)、1911年の卒業生で、中国で偉人とされる何香凝(1878~1972)の画業を紹介する展覧会です。中国・何香凝美術館で収蔵する代表作40点を展示しました。

第39回 造形「さがみ風っ子展」

10.24(火) - 10.30(月)

毎年恒例となった相模原市教育委員会主催による市立小中学校の作品を展示しました。

女子美ギャラリーニケ

ニケキュレーターズセレクション#02 山口藍展

4.14(金) - 5.24(水)

本学工芸科出身の山口藍さんを取り上げ、江戸時代の文化や風俗を題材に日本の「美」を表現する「組立式壁画」などを展示しました。

自由選択で作る自分だけのカリキュラム

女子美術大学短期大学部
1年前期 基礎造形2017展 7.7(金) - 8.2(水)

本学短期大学部1年生が自由選択授業で制作した18講座の作品を展示しました。

女子美スピリッツ2017 嶋田しづ展

9.8(金) - 10.29(日)

女子美術専門学校(現女子美術大学)、昭和17年の卒業生で、戦後バリで中心に活躍し、90歳を過ぎた現在も精力的に制作を続ける嶋田しづ(1923~)の画業を紹介しました。

歴史資料展示室

写真にみる女子美の歩み 一本郷から和田まで

4.6(木) - 8.5(土)

収蔵写真資料や映像資料を展示しました。

JAM

彫刻の五・七・五 一かたちで詠む春夏秋冬

11.8(水) - 11.28(火)

世界で最小の定型詩俳句に倣い五寸(15cm)×七寸(21cm)×五寸(15cm)の制約された空間のなかで彫刻表現の可能性を探ります。国内外の芸術系大学24校から教員・大学院生が参加します。

第64回 神奈川県高等学校美術展

12.5(火) - 12.17(日)

神奈川県下の高等学校相互の連携を図り、高校生の美術・工芸に対する関心を高め、情操の滋養と技術の向上の推進を目的とする発表会です。

平成29年度
女子美術大学退職教員記念展

1.10(水) - 1.31(水)

平成29年度に本学を定年退職される飯村和道教授の展覧会です。

平成29年度 女子美術大学大学院
博士後期課程研究作品発表会

2.9(金) - 2.15(木)

平成29年度に大学院美術研究科博士後期課程の学位申請を行う院生の展示・発表会です。

平成29年度 女子美術大学大学院修了制作作品展

3.11(日) - 3.17(土)

平成29年度に大学院美術研究科博士前期課程を修了する学生作品の展覧会です。

女子美ギャラリーニケ

第10回 五大学合同写真展 ○展

11.10(金) - 11.25(土)

女子美術大学・東京工芸大学・長岡造形大学・多摩美術大学・中国伝媒大学の五つの大学でそれぞれ写真を学ぶ学生の写真展です。

AP(アートプロデュース表現領域) 卒業制作展

1.19(金) - 1.31(水)

アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生による卒業制作の展示です。

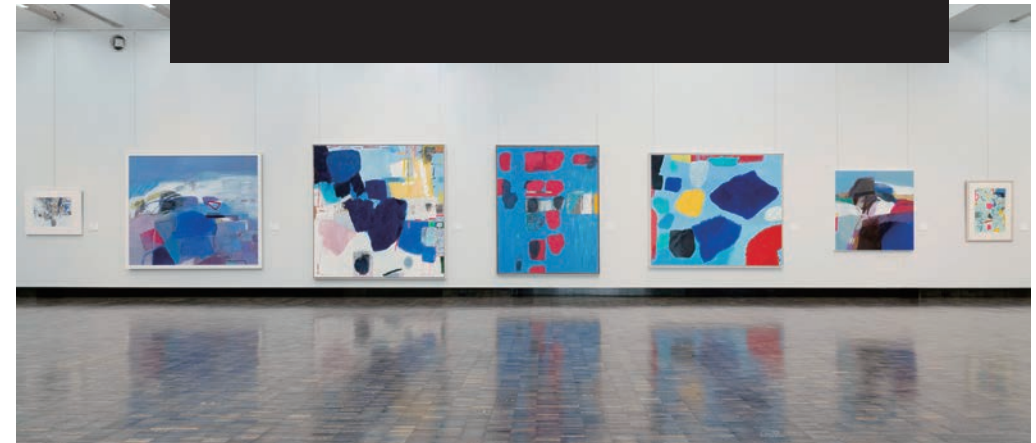
歴史資料展示室

女子美人物史展

10.25(水) - 3.11(日)

女子美術学校設立、初期学科、前後新設学科を、人物を通じて紹介します。

JAM 女子美アートミュージアム展覧会情報



2017.4.17(月) - 5.22(月) 相模原 女子美アートミュージアム 2017.6.2(金) - 6.28(水) 杉並 ガレリアニケ・110周年記念ホール

「女子美術大学同窓会設立100周年記念 青のかけ橋 佐野ぬい賞受賞作家展」

一般社団法人女子美術大学同窓会設立100周年記念事業のひとつとして「青のかけ橋」展を開催いたしました。本展では、佐野ぬい賞受賞作家5名と佐野ぬい先生の作品を一堂に展示しました。トークイベントでは、佐野ぬい先生、馬場知子氏、國吉晶子氏、小原典子氏、東田理佐

氏、平田智香氏に女子美術大学での作品作りへの思いと現在の活動についてお聞きしました。なお、同展は杉並校地ガレリアニケおよび110周年記念ホールにおいて、一部展示内容を変更して開催いたしました。



2017.7.5(水) - 8.4(金) 相模原 女子美アートミュージアム

「中西夏之展《私は願う 太陽に向かって種子を播きたいと》」

学内から展覧会の企画を募って開催した「中西夏之」展では、洋画研究室が中心となり、本学大学院客員教授を務めた中西夏之先生(1935~2016)の作品を展示しました。在学生による《カーボラダム・ホワイトラダム

“1975”の再現や、「ニッの環」のイベントなどを通して、描くことへの中西先生の思いを多角的に理解していただく機会となりました。



女子美術大学広報誌

発行 学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 総務企画部広報グループ
監修担当 伊藤雅敏・李谷吉也
デザイン協力 株式会社 Kitchen Sink.
印刷 株式会社 ヒーローズ
発行日 2017年11月20日
© 2017 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ | TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshi.ac.jp
URL <http://www.joshi.ac.jp>